

優秀賞（神奈川県福祉子どもみらい局長賞）

「妹が教えてくれたこと」

神奈川県立相模原中等教育学校 1年 高田 まゆ



私の妹のみゆは、生まれつきダウン症という特性をもち、知的障がいがあります。そこで私は、この作文を通して伝えたいことがあります。それは、ダウン症や知的障がいについて理解を深め、そのような特性をもつ人に対して、偏見や差別をせず公平に接してほしいということです。そして、障がいがある人だけでなく、現代社会を生きる全員が、お互いを尊重し合える温かい社会になってほしいと、私は思っています。

まず、ダウン症や知的障がいについて説明します。ダウン症は、生まれつきの染色体の変化によって起こる特性で、日本ではおよそ千人に一人の割合で生まれると言われています。特徴として、顔立ちや体の発達に共通点が見られることが多く、知的障がいをともなう場合も多くあります。知的障がいとは、主に十八歳までの身体や頭脳の発達の過程において、知的な能力や、生活する力の発達が、同年代の子達に比べて遅れている状態のことと言います。学習内容を覚えるのに時間を要したり、相手の言葉を理解するのが困難だったりすることがあります。また、気持ちを言葉にして伝えることが苦手で、大きな声を出し、体を大きく動かして反抗してしまい、驚かれることもあります。しかし、それはその人の個性でもあり、周りの私たちが教え方を工夫すれば、少しづつ成長していくのです。

確かに、障がいがある人は「できないこと」が目立つかもしれません。しかし、「得意なこと」がない人間など、一人もいないと思います。みゆは記憶することが得意で、毎日いくつもの子供のうたを覚えて歌っている姿を見ると、とても明るい気持ちになれます。このように、できないことがあって得意なことがあるのは、人間皆同じです。よって、障がいという言葉に重点をおくことは、その人の一部分しか見ていないことになると思います。また私は、「障がいがある人は可哀想」という言葉を耳にしたことがあります。しかし私は、絶対にそんな風には思いません。なぜなら、幸せな家庭に生まれ、深い愛情をうけ、素直にまっすぐ育ってきたみゆの顔は、いつも幸せな表情をうかべているからです。私たちはつい、「普通」という基準をつくり、そこから外れると、「違う」「変」ときめつけてしまいがちです。しかし、そもそも普通とは何なのか、誰が決めたのかなんて誰にも答

えられません。人それぞれ得意なことや苦手なことがあります。できることやできないこともあります。だからこそ、障がいを「特別」だと思って線を引くのではなく、個性として認めることが大切です。更に障がいがある人から学べることも多くあります。みゆは、自分を人と比べて落ちこむことがありません。人より明らかに劣っていても、笑顔を絶やさずひたむきに頑張る姿を見て私は、自分なりに頑張る大切さを学びました。

みゆは、私にとって本当に大切な存在です。障がいがあるからといって特別なわけではなく、共に成長し、互いに学び合えるかけがえのない家族です。また、障がいがある人を目の前にすると、一線を引いてしまう気持ちもわかります。そんな時は、どこか尊敬できる部分を見つけてみてください。障がいがある人だけでなく、世界中の全員がお互いを尊重し、認め合うことができれば、みゆをはじめとする障がいがある人みんなが、もっと生きやすい世の中をつくっていけるのではないかでしょうか。